ハーレムウィザードアカデミー

HAREM WIZARD ACADEMY

小説 竹内けん
挿絵 SAIPACo.

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

第一章　魔法使いの学校　006
第二章　女教師の口説き方　045
第三章　禁断の関係　092
第四章　放課後の教室　132
第五章　修羅場　168
第六章　女教師の意地　209

登場人物紹介

Characters

パールパティ

魔法学園に勤める女教師。
名門貴族のお嬢様で、知性
と優しさに溢れた女性。

セライナ

魔法学園の生徒会長。
クールな美貌と類稀な
魔法の才能を併せ持つ。

ケーニアス

地方貴族の当主である
父と、大魔術師である
母を親に持つ少年。

エリンシア

ケーニアスと共に魔法学園
に入学した地方貴族の娘。
勝気な性格。

『第三章　禁断の関係』より

完全否定できないのが、自分でも情けない。
「うふふ、いいわよ。期待通り、いっぱいイ・ジ・メ・てあげるわ♪」
細い指先がピンッと逸物を弾いた。
「はう」
「うふふ……ゾクゾクするわね」
無様に悶える少年を見下ろして舌を出したセライナは、ペロリと自らの唇を舐めた。
「そうね、まず皮を剥きましょう」
「え、やめて……それ、すごく痛いです……」
包茎少年は慌てて訴えたが、セライナは聞く耳を持たなかった。
「ダメよ。男の子はここが剥けてこそ一人前なのよ。剥けてない男は普段から耐性に弱くて、早漏になるというわ」
「早漏……」
自分でも自覚があったケーニアスは顔色を失う。
「そう、早漏っていうのは、女にとってもっとも許しがたいおちんちんだって言うしね。きみはあたし好みのいい男に、セックスも上手な男になってもらうわ」
ケーニアスの両脚の間に跪(ひざまず)いたセライナは、肉幹を両手で持ち、薄い口唇からトロー……と透明な粘液を滴らせ、包皮から少しだけ剥き出している亀頭部に垂らす。
それから包皮の先端に両の親指をあてがい、ぐいっとばかりに剥き上げてしまった。

「はぅ……い、痛い……」
「綺麗なピンク色ね。なんてかわいい」
敏感な粘膜に空気が触れる痛みに悶える少年にお構いなく、美しき魔女は満足げに亀頭を観察する。
「これからは普段からこうやって剥いて鍛えておきなさい」
「そ、そんな……む、無理です」
「無理を可能にするから魔法使いというんでしょ。頑張りなさい」
亀頭を剥き上げられたケーニアスは、さながら陸に揚げられた魚のように、肢体をピクピクと痙攣させ、口をパクパクと開閉させている。
「それにしても、きみのおちんちん、改めて見るとなかなかどうして凶悪な形をしているわね。この左右に張ったエラでガリガリ掻かれたらどうなってしまうのか、想像するとちょっと怖いわ」
肉棒を両手で抱き締めてしげしげと観察していた非情なるお姉さまは、もう我慢ならないといった様子で、いきなりぱくりと亀頭を咥えてしまった。
「ひぃ」
敏感すぎる器官への刺激に、ケーニアスは白目を剥いて痙攣する。
フェラチオをしてもらったのは初体験だ。
担任教師のパールパティは、教え子に押しきられて仕方なく身体を開いたという教師と

しての体面に拘(こだわ)っているからか、終始受け身であった。
それに対してセライナはどこまでも積極的で貪欲だ。
魔法の蔦で手足を縛られてM字開脚を強要されてフェラチオをされるのは、まるで女がクンニされるかのようで、屈辱的だが、気持ちいい。
ジュルジュルジュルジュル……。
「うふふ、気持ちよさそうな顔しちゃって……チュプチュプ……あはっ、先端からお汁が溢れてくる。ジュル♪　エッチね、きみのおちんちん……プチュチュ……」
根が研究者体質なのだろうか。悶える男の様子を窺いながら有無を言わさずしゃぶりついてくるセライナを前に、ケーニアスはたまらない気分になった。しかし、どうにか耐えられたのは、今日の放課後、すでにパールパティと一戦交えて射精したからだろう。
考えてみると、パールパティの胎内に入り、愛液漬けになったあと、お風呂にも入っていない逸物を、セライナにしゃぶられているのだ。申し訳ない気分で一杯になる。
「セ、センパイ。ぼくにもご奉仕させてください」
ケーニアスの懇願に、セライナはいったん逸物から口唇を離した。
「きみ、あたしのことを怖がっているんじゃないの？」
「そ、そりゃ、怖いですけど……その、センパイが魅力的な女性であることは確かですし。ぼ、ぼくにも……セ、センパイのおま○こ、舐めさせてください」
ケーニアスの必死な嘆願に、氷の魔女は少しほだされる。

「そうね。確かに、あたしだけ一方的に舐めるのは公平ではないわね。いいわ、きみの大好きなおま○こを舐めさせてあげるわ」
身を起こしたセライナはいそいそと水色のスカートの中に両手を突っ込んだ。そして、スルスルと淡い水色のショーツを脱ぎ下ろす。
「っ！」
ブラジャーを取ったときのように、あっさりと陰部も晒すかに思えたセライナが、唐突に頬を赤らめて、スカートの裾を手で押さえて、陰部を隠した。
「……どうしたんですか？」
「い、いや、こ、これは結構恥ずかしいな」
クールビューティーなお姉さまが、らしくないことに羞恥に震えている。
しかしながら、ことここに至っては男子が我慢できるはずがない。
「ぼくだってセンパイに、おちんちんしゃぶられて恥ずかしいんですから、センパイも腹をくくってください」
「仕方ないな。あたしはどうも惚れた男に甘い女だったようだ」
それは勘違いだと思います、とケーニアスは言いたくなったが、ぐっと我慢する。
濃紺のミニスカートの裾を押さえたままのセライナは、ギクシャクした動きで両脚をケーニアスの顔面に跨がせた。少年の頬の左右に、お姉さまの生太腿がそそり立つ。
いわゆる女性上位のシックスナインである。

ケーニアスとしてはすぐさま邪魔なスカートをめくり上げようとしたのだが、両腕は魔法の蔦で拘束されていて、意のままにならない。
「あの……センパイ、腕……」
白い顔を紅潮させたセライナは首を横に振るう。
「ダメよ。きみかわいい顔して結構野獣タイプっぽいし。自由にさせたら、とんでもないことされそう」
「でも、これじゃ蛇の生殺しです」
スケベ少年の懇願に、知的な生徒会長は溜息をつく。
「わかっているわよ。そう急かさないで。まったく意外にスケベなやつね。まぁ、そういうところも嫌いじゃないけど……」
必死に年上の女としての見栄を張ろうとするセライナは、左手で逸物を握り締めたまま、肘で上体を支え、震える右手を下半身に下ろしてきた。
そして、濃紺のミニスカートをたくし上げる。
「っ！」
白く長い太腿の付け根には、頭髪と同じつややかな青い陰毛が萌えていて、肉裂が少しだけ開いていた。
少年の突き刺さるような視線を陰部に感じたのか、ピクピクピクと女体が震える。
「ふう……」

熱い吐息を吐いたセライナは、さらに人差し指と中指を、肉裂の左右に添える。
「セ、セライナさん……」
「ここ、見たかったんでしょ。いいわ見せてあげる……あっ♪」
二本の指によって、肉裂はカパッと菱形に開かれた。
「み、見える？　あたしの、おま〇こ見ている？」
このクールビューティーで変人なお姉さまでも、やっぱり生殖器を視姦されるのは恥ずかしいのだろう。
声は上ずっているし、四肢もビクビクと震えている。
「見えます。しっかり奥まで、すっごい綺麗です。センパイのおま〇こヒクヒクしていて、濡れ濡れです」
「ああ♪　解説はしなくていいわ……」
後輩を弄びながらセライナもかなり興奮していたという証左であろう。薔薇の花のようなお肉が、朝露に濡れたかのようにしっかりとコーティングされている。
（あ、クリトリスだ。ヴァギナだ。アナルだ）
氷の魔女と称えられるほどのクールビューティーなお姉さまの股間にも、しっかり生殖器官はあり、排泄器官もあるのだ。
そんな当たり前のことが不思議であり、興奮を誘った。
「あの、センパイ、センパイのおま〇こ舐めたいです。腰をもっと下ろしてください」

「まったく、注文が多いわね。こう……」
セライナはどこまでも年上の女としての余裕を演出したいらしいが、それが演技であることはケーニアスにも、手に取るように伝わってくる。
それでも膝を少しずつ開いていき、ついには潰れた蛙のような足になって、剥き出しの陰部を少年の鼻先に下ろしてきた。
プーンと香る牝の匂いに、ケーニアスの食欲は刺激される。
「では、いただきます」
餓えた少年は舌を伸ばすと、氷の魔女の媚肉にかかっているシロップを舐めた。
「ひぁん……」
羞恥の悲鳴を上げるお姉さまになど関係なく、ケーニアスは夢中で舐めしゃぶる。
(センセイのおま○こよりもあっさり風味で、少し苦味が強いかな)
同じ女でも、いろいろと違うものらしい。どちらが上下というわけではなく、素直に両方とも美味しいと思う。
ピチャピチャと我を忘れてしゃぶりつくケーニアスに呆れた声が浴びせられる。
「きみってば、そんな虫も殺さない顔して、じつはむっつりスケベだったのね」
「え⁉　ぼく……むっつりスケベじゃなくて、あからさまにスケベだと思います。綺麗な女の人大好きですし……」
「まったく開きなおっちゃって……。しかし、こ、これは……気持ちいい……。なるほど

男にはまって身を持ち崩すバカ女の気持ちが初めて理解できたわ。これをやられたらたまらないわね」

ヒクヒクと下半身を痙攣させていたセライナだが、下半身に下ろしていた腕を戻すと、両手で逸物を抱え込み、亀頭部を美味しそうにチュプチュプとしゃぶり始めた。

（あう、そんな吸われたら……）

さすがは頭のいい女性だけあって、男がどうされたら一番感じるのか、もう見抜いてしまったようだ。

唇の内側で、逸物のエラの裏側を引っ掛けながら、チュウチュウと啜り上げたのだ。

フェラチオ初体験中のケーニアスは、パールパティの膣穴に挿入したときとはまた違った気持ちよさに身悶えた。

（あぁもう出る。出ちゃいそう。で、でも、この状況でぼくだけイクのはかっこ悪すぎるよなぁ……）

男としての見栄を刺激されたケーニアスは、必死に逸物を気合いでとどめながら、目の前の女性器にしゃぶりついた。

「くぅ……」

どうやらセライナも、自分が弄んでいる少年に、先にイかされるのは恥だと思ったらしい。

こうなれば男と女の意地比べだ。

二人ともピクピクと痙攣しながらも、夢中になって互いの生殖器をしゃぶりあう。
「んん、うん……ふん……」
肉棒を咥えて鼻を鳴らす生徒会長は、我慢ならなくなってきたのだろう。陰唇をゴリゴリと少年の顔に押し付けてきた。
これはもはやクンニというよりも、女が男の顔を使ってオナニーをしているかのようだ。
しかし、魔法の蔦で拘束されているケーニアスにはなすすべがない。
(う……、センパイってば、クールな顔してじつは好き者……あう、もう限界かも)
女にむしゃぶり吸われている逸物がピクピクと脈打った。そして、睾丸から肉筒を通って熱い液体が噴出す。
「センパイ、もう出ますっ!!!」
雄叫びを上げたときには、もはや決壊していた。
どくんっ！　どくんっ！　びくんっ！
「んんんん!!!」
プシャッ。
男が果てるとほぼ同時に、女の亀裂からも水風船が爆発したかのように、熱い雫が舞い散った。
「うん、うん、うん……」
セライナは一滴も漏らすまいとするかのように唇を閉じ、すべてを受け止めてくれてい

『第五章　修羅場』より

「ちょ、ちょっとなにを」
慌てるセライナの両の太腿を抱えると、そのまま身を起こした。
「っ⁉」
背面の座位で大開脚状態。当然、エリンシアの視界には、セライナの蜜壺に、男根がずっぽりと入っているさまが見えただろう。
目を点にして見ていたエリンシアがポツリと呟いた。
「だらしないおま〇こ……」
ビクリッとセライナは震えた。
その様子にエリンシアの口元が嗜虐的に歪む。
「生徒会長だ。氷の魔女だっていっても、ここはグッチョングッチョンじゃない！」
「……」
「いくらかっこつけても、ニアのおちんちんが欲しくて嫉妬していただの女なんですね。わたし負けないもん！」
同じ女として、相手の本心を悟ったエリンシアは、いままでのお返しとばかりに軽蔑した表情を浮かべると、セライナの陰核を摘んだ。
「こうしてあげる」
「ひぃ、ちょ、ちょっと、ダメ、いきなりあんた、なに強気に、はんっ♪」
男根を咥え込んでいるだけで、女としては十分に気持ちいいのに、さらに女の最大急所

を捕らえられたセライナは悲鳴を上げた。
いままで散々に嬲られたエリンシアが容赦するはずがない。
「これからは氷の魔女ではなく、淫水の魔女と名乗ったらいかがですか？」
「いあぁぁ……だ、だめぇぇぇッッッ!!!」
包皮を剥き上げられた中身を、ペロペロと舐められたセライナは、惑乱の声を出す。
（センパイってば、受け身になるとかなりかわいいかも）
キュンキュンキュンキュンと心地よくしてくる蜜壺の感触に酔いしれながらも、ケーニアスは、エリンシアに呼びかけた。
「なぁ、シア」
「なによ？」
高慢な先輩を弄ぶことに夢中になっていたエリンシアは煩わしげに顔を上げる。
「あの……」
いまからお願いすることにやましさを感じたケーニアスは言いよどむが、結局は自らの欲望に負ける。
「その場でうつ伏せになって、お尻をこっちに向けて」
「えっ！」
エリンシアは瞬きをし、それからケーニアスがやろうとしていることを悟って、のけぞる。

「ちょ、ちょっとあんたってば、もしかしてわたしとこの先輩を、同時にいただこうとか考えているの？」
「うん、エリンシアの中にも入れたいんだ」
「うわ、最低～」
軽蔑したジト目を向けてきたエリンシアに、ケーニアスは必死に訴えた。
「いや、でも、センパイだけ気持ちいいのって不公平かなって、ぼくシアにも気持ちよくなってもらいたいし、二人とも同時に気持ちよくなってもらうにはそれしかないかなって」
「まったく調子いいんだから。まぁ、ニアだし仕方ないか。どうせあんたは、その淫乱な先輩に、一時的に騙されているだけよ。わたし、心の広い女だからね。あんたの蒙昧が覚めるまで付き合ってあげるわよ」
ぶつくさと文句を言いながらもエリンシアは、四つん這いになってかわいいお尻を突き出してきた。
その背中に、すっかりでき上がってしまっているセライナを覆いかぶせる。
親ガメの背中に子ガメが乗ってという形で、エリンシア、セライナ、ケーニアスの三段重ねができ上がった。
（よ～し）
舌舐めずりをしたケーニアスは、まずはセライナの蜜壺から逸物を引き抜く。
「ああ、いいところでやめないでちょうだい」

「わかっています。すぐに戻ってきますよ」
力強く請け負ったケーニアスは、セライナの愛蜜で濡れ輝く逸物を、すぐ下にあったエリンシアの蜜壺に添えて挿入。
「「あん♪」」
気持ちよさそうな嬌声を上げたのは挿入されたエリンシアだけではなく、セライナの口からも漏れた。
たとえエリンシアの蜜壺に入れるときでも、男の腰はセライナの尻を打つわけで、振動が伝わるのだろう。
「このまま交互に入れてあげますからね」
二人の女を同時に気持ちよくしなければ不公平だと感じたケーニアスは、張りきって上下の蜜壺を行き来した。
（くぅ、シアのおま○このほうが狭くて柔らかい。センパイのおま○こは硬くてよく締まる）
どちらの蜜壺も気持ちいいことには違いないのだが、そのちょっとした違いを楽しむ。
（おぉ、やっぱりシアのほうが熱いな。でも、センパイのほうが奥の奥までよく濡れている。くぅ、どっちもいい。これじゃすぐにイっちゃう）
愛しい女二人を並べて、交互に楽しむ贅沢に、ケーニアスはすぐにでも射精してしまいそうだったが、それはあまりにももったいない。

「あん、ああ……ケーニアスのちんぽ、気持ちいい。やっぱりあたしとケーニアスって相性ばっちりなのよ」
「そんなことないもん。ニアのおちんちんは、わたしの身体と相性がいいんだもん」
「どっちのおま〇こも気持ちいいですっ!!」
張り合う女たちにケーニアスは必死に訴える。
睾丸から溢れだした精液が、肉棒の先端にまで詰まっていることを自覚しながらも、スケベ少年は、射精しない速度を自分なりに測りながら、上下二つの蜜壺をゆっくりと行き来した。
(あぁ極楽だぁ~。災い転じて福となるってまさにこのことだよなぁ。これからはシアとセンパイの二人をずっと楽しんじゃおう)
調子に乗ってなんとも傲慢なことを考え始めた少年に、女たちは口々に訴える。
「あん、いい、もっとあたしの中に入れなさいぃぃぃ!」
「だめぇぇぇ、わたしのほうをいっぱい突いてくれないとダメぇぇぇぇっ!」
気持ちよさそうに必死に訴えるセライナとエリンシア。
二つの肉壺を行き来するケーニアスは、必死に平等に扱っていたが、最終的に射精するのは、一人しかありえない。
どちらに射精しようかなどと嬉しい悩みを考えながら、なにげなく二人の顔を見て驚く。どちらも痴情に溺れながら、瞳を爛々と輝かせているのである。

（なんだろう？　センパイも、シアも目が妖しく光っているような……）
根拠はないが、現在、自分が二人に対する主導権を握れているのは、砂上の楼閣にすぎないような気がしてきた。
射精したら最後、攻守は逆転する。
カマキリの牡は、牝と繋がったあとに、牝に食われてしまうことがあるという。
本能的に思った。出したらダメだ。出したら最後食い殺される。
（耐えろ、耐えろ、ぼく。いま出すのはまずい。なんだからわからないけどまずい。せめて二人とも満足するまで耐えるんだぁぁぁッ!!!）
本能的な恐怖に囚われたケーニアスは、射精だけは我慢し、とりあえず二匹の牝犬を絶頂させようと頑張っていたときである。
突如、背中にふわりと温かい刺激がきて、ありえない声が聞こえてきた。
『浮気者』
静かな怒気を含んだ女の声に、ケーニアスは震えあがった。
（え、空耳……）
とっさにそう思った。いや、思いたかった。ここでは聞こえるはずのない声だったからだ。しかし、彼女の声を聞き間違えるはずがない。
背後からぐいっと抱き締められた。背中にふわふわの豊満おっぱいの感触がある。
（いる。センセイがここに……）

どっと冷や汗が出る。
しかし、ケーニアスの目にも見えない。セライナもエリンシアも騒がないところを見ると、パールパティは、姿を隠す魔法を使っているのだろう。
追いつめられた少年は、背後に恐る恐る呼びかけてみた。
『センセイ……どうしてここに？』
一拍置いて返答があった。
『昨日のケーくんなんかおどおどしていたから、なんかあるなっと思って、部屋を覗いてみたのよ。そうしたら、これでしょ。わたしのことを散々好きだって言っていたくせに。結局、若い女を二人も侍らせちゃって』
パールパティの声は優しいが、怒りの波動は十分に伝わってきた。
『こ、これはその……』
『言い訳は無用よ。この間のお返しをしてあげる……覚悟しなさい！』
肛門にぬらりとした刺激がきた。どうやら、パールパティの舌先が舐めてきたらしい。
「はぐっ⁉」
ぞくっとする快感に、ケーニアスは震えた。
「どうしたの？」
ケーニアスの調子っぱずれな声に気づいたセライナが質問してきた。
「お二人の中があんまりにも気持ちよくて……」

冷や汗を流しながらケーニアスはどうにか応じる。
たださえエリンシアとセライナが張り合っているのに、ここにパールパティが出てきて、二股どころか三股をかけていたなどと知れたらどんな事態になるか想像もできない。
現在、パールパティが来ていることは口が裂けても言えなかった。
（あとちょっと、もうちょっと、いまこの中途半端なときに出したら最悪だ。欲求不満になった二人がなにをするかわからない……でも、気持ちいいよぉ～）
射精を我慢するケーニアスとしては、せめて腰を止めたかった。しかし、それをやったらエリンシアとセライナは冷めてしまうだろう。再び二人を高めるための努力を思えば、それだけはできない。
（ちょ、ちょっと、も、もうダメぇぇぇッッ!!）
すでにエリンシア、セライナという美少女美人の蜜壺を交互に楽しむという、十分に常識外の快感と闘っていたケーニアスにとって、パールパティの情け容赦のないアナル舐めは、ダメ押しとなった。
「はぅ……」
なんとも情けない悲鳴を上げると、全身がビクビクビクと震えだす。その震えが逸物に波及するまで時間はかからなかった。
どびゅぶしゅドビュビュビュ――――……!!!
せめてもの配慮で、どちらか一方の蜜壺で出すのはまずいと悟ったケーニアスはとっさ

に逸物を引き抜く。
白濁の液体は、美人と美少女の裸身に浴びせられる。
「きぁぁぁぁ、熱いいいいい」
「いっぱいかかってるぅぅぅぅ」
セライナの背中から股間、エリンシアの股間から腹部まで白濁液で染め上げる。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
思う存分に精液を吐いて、頭を下げる逸物と同じように、ケーニアスもまた頭を下げて脱力する。
そこに精液まみれとなったセライナとエリンシアが身を起こしてきた。
「きみ、存外だらしないわね。もう出すなんて興醒めよ」
「確かに、女を二人も侍らせながら、どちらも満足させることができずに果てるなんて最低だわ」
欲求不満の牝たちの視線が怖い。
「いや、こ、これはその……」
二輪車に酔いしれながら、どちらも満足させられずに果てるなど、確かに男としてだらしがない。
（あう……センセイさえ邪魔しなければ、二人とも満足させられたと思うんだけど……）
姿を見せぬパールパティに文句を言いたいところだが、そうもいかない。

「えっ、センセイ……？」
戸惑うケーニアスの前で、パールパティは顎に滴る唾液を右手の甲で拭った。
「気持ちよさそうな顔しちゃって、あの娘たちとわたしとどっちが気持ちいいの？」
「え、えーと……そりゃセンセイのほうが……」
ケーニアスの答えに、パールパティはにっこりと笑う。
「うふふ、ほんと調子いいんだから……でも、嬉しいわ。サービスしちゃう」
「サービス？」
意味ありげに笑ったパールパティはドレスの胸元をはだけさせると、巨大な双乳を露出させた。
学生とは違う。牝としての完成形体と思わせる乳房だ。その柔らかい塊を両手で持ち上げたパールパティは、自らの乳首を交互に吸い立てる。
「うちゅ、チュ……はぁん……この、おっぱいで挟んであげる♪」
「えっ、おっぱいで挟む？」
「そ、おちんちんをわたしのおっぱいで挟んであげる。リリカルさんに教えてもらったの。坊ちゃんは絶対に歓ぶってね」
ケーニアスは、パールパティの大きくて柔らかい乳房が大好きで、初体験のときから揉みまくり、しゃぶり尽くしてきたわけだが、パイズリという発想は浮かばなかった。
いつもいきり立つ逸物を、膣穴に叩き込むのが忙しくて、そのような遊び心に気づく余

裕がなかったのだ。
しかし、そういう性戯があると知れば、むしょうにやってみたくなるのが男心というものだろう。
「ぜ、ぜひお願いしますっ！」
「うふふ、それじゃ、挟んであげるから、ベッドに仰向けになってね」
「はい」
ケーニアスは言われるがままにベッドに仰向けになると、大の字になった。逸物だけが浅ましく天を衝く。
「ケーくんってほんと、どうしようもないスケベ少年なのよねぇ♪」
大きな柔乳を揺らしながらパールパティもまた、いそいそとベッドに乗ってきた。そして、ケーニアスの両脚の間に蹲る。
「よいしょっと♪」
重たげな乳房を両手に持ったパールパティは、お尻を高く翳しながら上体を沈めると、いきり立つ逸物を胸の谷間に逸物を挟むことに成功した。
「ああん、熱い……まるで焼き鏝にでも挟まれたみたい……」
「ああ……センセイ……。センセイのおっぱいも暖かいです……」
柔らかくふわふわしたお肉に、硬い逸物が埋まってしまった。その光景を目の当たりにしてケーニアスは歓喜に震える。

「ケーくんってばほんと、わたしのおっぱい好きね♪」
「はい。それはもう……大好きです」
「あの娘たちよりもわたしのおっぱいのほうが大きいものね」
ケーニアスを揶揄しながらも、女としての優越感に浸った表情のパールパティは、左右の乳首を内側に向けて、肉棒の傘の部分をコリコリと刺激してきた。
「もう、ケーくんのおちんちんってほんと元気。もう、先走りの液をこんなに出しちゃって、あぁ……エッチすぎるぅ……」
大きな肉塊を動かすのだ。重労働なのだろう。パールパティの全身から汗が噴き出してヌラヌラと輝いている。
一生懸命に乳房で逸物を扱きながら、女豹のポーズで高く翳したお尻を、クネクネと動かす。
「あぁ……センセイのほうがエッチすぎます……。こんなことされたらぼく、すぐに出てしまいます……」
「いつでもいいわよ。わたしはケーくんの玩具ですもの」
学校では生徒に人気の厳しくも温かい女教師。その正体がこんな淫乱痴女だとはだれも予想できないだろう。
もっとも、最初は外見通りの清純派の先生だったのだ。
（ぼくがセンセイをこんな好き者にしちゃったんだ。もうセンセイはぼくのものだ。だれ

にもやらないっ！）

独占欲と優越感に浸ったケーニアスが、恍惚の中、射精しようとしたときである。唐突に甲高い叫び声が響いた。

「パティ姉さん⁉　……こんなウソ⁉」

顔を向けると、部屋の入口には大きな目を見開いたエリンシアが、口元を手で覆って立ち尽くしている。

「……っ」

目先の快楽に流されていた少年は、別室の女たちのことをすっかり失念していた。

最悪の形で登場した幼馴染を前にケーニアスもまた目を見開いて硬直したが、パールパティは慌てず騒がす艶やかに応じる。

「あはっ、見つかっちゃった♪」

「見つかっちゃったって。パールパティ先生、わざとあたしたちに見つけさせたんじゃないですか」

エリンシアについで入室してきたセライナが、ぽいっと魔法宝珠を投げて寄越した。

どうやら、遠聞きの魔法が発動されているようである。つまり、この部屋での睦言は居間にまで筒抜けだったということだ。

ケーニアスは目の前が真っ暗になった。

殺気を漂わせる生徒会長と、動揺に涙する従妹。そして絶望する恋人を前にしても、パ

ールパティは一向に悪びれた表情を見せない。
そこに動転したエリンシアは、イヤイヤと首を振るいながら口を開く。
「もしかしてとは思っていたけど……パティ姉さんとニアが……」
セライナは頭をガシガシと掻きながら口を開いた。
「あたしと初体験したとき、妙に余裕があった気がしたから、まさかとは思っていましたが、センセイが先に食っていたんですか？」
「うふふ……そうよ。あなたたちは、どちらがケーくんの恋人かって張り合っているみたいだけど、わたしのほうが昔っからケーニアスくんの性の奴隷なのよ♪」
パールパティの堂々たる宣言に、ケーニアスはめまいを感じた。
（殺される。今度こそ殺される）
心の底から震え上がるケーニアスに、蒼きスカートの裾を翻したセライナはズンズンと歩み寄ってきた。
「なんども言いますけど、そいつはわたしの恋人ではなく、下僕。それにしてもケーニアス、さすがはあたしの見込んだ男ね。自分の恩師をここまで調教しちゃうだなんてたいしたものだわ」
「あは、はは……」
どうしようもなく追い詰められた状況に、乾いた笑い声を上げているケーニアスから視線を逸らしたセライナは、女教師の股間を覗き込んだ。

「でも、さすがのあたしも、これはちょっと引くわ」
呆れ顔を浮かべたセライナは、パールパティのお尻から尻尾のように生えている異物の先端を摘んだ。
「いや、動かさないで……」
それはどう聞いたって動かしてという言葉にしか聞こえない。
セライナは容赦なく引いた。
「あわぁわわわわ……」
なんとも情けない悲鳴を上げたパールパティはお尻をさらに高く翳す。
ズズズスーッと肛門が引っ張られながらも、ケーニアスの逸物に模された異物が外界にその雄姿を晒した。
「あ、あんな大きなものが、パティ姉さんのお尻に⁉」
口元を押さえたエリンシアは、驚嘆に目を大きく見開いている。
「……」
恥辱に震えるパールパティは、真っ赤にした顔を伏せている。
見慣れた形の異物を右手に翳したセライナは、興味深げにしげしげと眺めた。
「へぇ、よくできているのね。でも、これって魔法具でしょ？」
セライナは試しに魔力を注ぎ込んでみたようだ。
ブルブルブルブルッ!!!

張り型は機械的に激しく振動する。
「すごいのね～。これもう一度入れてあげるわ。センセイ」
「や、やめてぇぇ……そんなに暴れているの入れられたら、お尻が壊れちゃう……」
「うふふ……やめない」
笑顔で宣言したセライナは、毒蛇のように頭をのたうたせる異物を、再び巣に押し込んでやった。
「はがぁぁぁぁぁ……」
「ついでにこっちも」
悶える女教師の痴態に目を輝かせたセライナは、さらに膣穴から突き出している異物の先端も摘み、魔力を注ぎ込んだ。
当然、膣内でも魔法具は暴れだす。
「な、中でぶつかるぅぅぅぅ。はがぁぁぁぁぁぁ!!!」
肛門と膣洞で暴れ回る魔法具。それが薄い肉壁を挟んでぶつかり合っているらしい。
その過激な刺激に耐えられずパールパティは、ガクガクと肢体を震わせて、大きく目を見開きながら涙を流し、大きく開いた口唇からは涎を噴く。
しかし、意地でも胸に挟んだ逸物は離そうとしない。
「へぇ～、面白いわね」
舌舐めずりをしたセライナは、手に摘んだ二つの魔法具を交互に出し入れさせてみた。

「ひぃ、ひぃぃぃ、ひやぁぁぁぁ!!」
ブシュブシュブシュブシュッ。
高く翳された女教師の桃尻は、卑猥さの極致のような踊りをし、異物の突き刺さっている狭間からは、飛沫のような愛液がとめどなく噴き出している。
それでも必死になってパイズリは続けているあまりの痴女っぷりに、ショックで呆然としていたエリンシアが声をかけた。
「パティ姉さん」
「あぁ〜エリー……、だめよ。見ないでぇぇぇぇ」
言葉とは裏腹に気持ちよさそうな女教師の訴えを、生徒会長が嘲弄する。
「教職にある者がウソを言うのは感心しませんね。センセイは見られたいんでしょ。センセイはわたしたちに見せつけたかったんでしょ。自分はこんなにもケーニアスに愛され、愛しているって。違いますか？　この変態教師」
冷徹なる生徒会長の容赦のない言葉責めを受けて淫乱教師はイヤイヤと首を振るうが、声に出しては否定しなかった。ただただ悶絶する。
「それにしても、さすがは大人の女ね。すごい色気だわ。同性のあたしでも見ていてドキドキしてきちゃった」
凄絶なる痴態を前に、サドっ気を存分に刺激されたセライナは、目を爛々と輝かせながら生唾を飲んだくらいである。異性のケーニアスは完全に取り込まれた。

「ぼ、ぼく、もう……」
柔らかくも温かい乳肉に包まれた男根がビクビクと震えだし、ケーニアスは限界を訴えた。
「も、もう……出ちゃうの？」
パールパティは少年の射精を促すために、乳房の狭間から飛び出した亀頭の尿道口をぺろぺろと舐めほじってきた。
「あ、ああ……」
逸物に対する刺激という意味だけならば、膣穴にぶち込んだときのほうが断然気持ちいいが、現在のパールパティの卑猥さは、尋常ではない。ケーニアスは快感のあまりガクガクと震えた。
「くっくっくっ……いいぞ。この淫乱教師の顔面にたっぷりと浴びせてやるといい」
淫女の股間に突き刺さった二本の異物を操りながら、セライナも射精を促してきた。
「くっ……」
幼馴染が射精する直前だと悟ったエリンシアも、目を皿のようにし、口元を押さえ注視している。
ブルッ、ブルブルブル……ッ
温かくも柔らかな乳肉に包まれながら、肉棒が踊った。
（もう、あとはなるようになれだ……）

この異様な状況に腹をくくったケーニアスは、牡としての欲望を解放させる。
ブシュ……!!
女の柔肉に包まれた肉棒が激しく脈打ち。痴女と化した女教師の鼻先に向かって、白濁液を噴出させる。
そしてまた、牡の原液を浴びたことで、牝もまた絶頂を極めたようだ。
「わたしも、イっちゃうぅぅぅぅぅぅぅ!!!」
歓喜の牝叫びを上げた女教師の股間からは、まるで水風船でも爆発したかのように熱い液体が噴出する。
ブシュュュュュュュュュュュュュュッ!!!
ドピュドピュドビュビュュュュュュッ!!!
恍惚となっている美しき女教師の顔から豊満な胸元にかけてが、みるみるうちに白く染まっていく。
ケーニアスの射精が終わるころには、パールパティの潮吹きも終わっていた。
「なかなか面白い趣向ではあったわ」
絶頂を極めたあとは下手な刺激は欲しくなかろうと察したセライナは、武士の情けとでもいうかのように、パールパティの膣穴と肛門に入った二本の異物を引き抜いてやった。
「はぁん、はぅ……はぁ、はぁ、はぁ～……」
凶悪な異物を抜かれたパールパティは疲れ果てた犬といった風情で、男の股間に顔を埋

めて余韻に浸る。
「うわぁぁぁぁ……パティ姉さんって変態だったんだ……」
痴女としか言いようのない従姉の絶頂を前に、エリンシアは呆然と呟いた。
「ふぅ……」
やがて一息ついたパールパティが、絶頂の余韻を楽しむかのように気だるげに長髪を掻き上げながら、上体を起こした。
「これでわかったと思うけど、この子はあなたたちと二股していたどころか、わたしを入れて三股をしていたのよ」
「そうみたいですね」
「二股という話はよく聞くけど、三股だったなんて……」
セライナの冷たい視線と、エリンシアのジト目が、ケーニアスの顔に突き刺さる。
(センセイ、やっぱり怒っていたんだ……)
絶体絶命で身動きのできないケーニアスに、意外にもパールパティが助け舟を出してくれた。
「あなたたちはケーくんを独占したくて張り合っているみたいだけど、この子はいまエッチが楽しくて仕方がないのよ。ちょっと綺麗な女に誘惑されたら、すぐにおちんちんくれてやっちゃうくらいの無節操状態ね。こんなエロ餓鬼を一人の女が独占しようなんて無理よ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円（税込）

全国書店で
好評
発売中

「…藤田君は責任取るべき」

睦月への想いに身を焦がす マキナ
彼女は夜の教室で……!?

思春期なアダム3

［小説：さかき傘／挿絵：天海雪乃］

全国書店で
好評
発売中

「当方Mドレイ希望」

魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

ご主人サマ募集中!!

不死の吸血姫がドSのご主人様を募集しているようです

［小説：酒井仁／挿絵：にの子］

女幹部メル様のセカイ征服計画！

［小説：高岡智空／挿絵：鈴眼依縫］

2010
8月下旬
発売予定!!

悪の秘密結社vs正義のヒーロー

イケない戦いの記録!

既刊LINEUP
全国書店で好評発売中

- ●仙獄学艶戦姫ノブナガ!! ①〜③
- ●拘束!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!
- ●BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜
- ●借金お嬢クリス ①〜③
- ●プリンセスリバーシ!! 交換する美姫と魔姫
- ●無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
- ●ビルグリムメイデン ①〜②
- ●呪詛喰らい師【カースイーター】
- ●魔海少女ルルイエ・ルル

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!